

閉会の辞

金 田 忠 吉

第21回熱帯農業研究国際シンポジウムを終えるに当り、閉会の辞を述べることは、大変光栄に存ずるところであります。

日中共同研究として雲南省農科院を舞台に水稻育種が開始されてから2期6年を終わろうとしているこの年を記念してのシンポジウムは誠に意義深く、また大きな成果を収めたものと信じます。

このシンポジウムは、まず9月上旬からの約1週間の昆明・宜良における立毛検討会に始まったといつてよく、次いで鹿児島から筑波に至る約1週間でしめくくられた訳ですが、この間の両国の研究・行政関係者の並々ならないご尽力に対して、深い敬意を表するものであります。特に両国の研究機関、即ち雲南省農科院及び熱帯農研センターの、呉自強院長先生、梶原敏宏所長をはじめとする各関係者の方々の周到な準備、献身的な努力がこのシンポジウムの成功をもたらしたものと思います。

さらに、このシンポジウムのために貴重な時間をさいて講演の準備をなされた各発表者に対しても厚く御礼を申し上げ、若干の時間を頂いて、それぞれの発表の主旨を振り返ってみることにより、発表者に対する謝意を表したいと考えます。

最初に開会式に当り歓迎の辞を賜った農林水産技術会議事務局 畑中孝晴局長、はるかに中国から祝辞をお寄せ頂いた農牧漁業部長 何康先生、中国における水稻科学技術の発展と展望について御講演下さった農牧漁業部科学技術司の瞿寧康先生、基調講演を頂いた雲南省農業科学院長 呉自強先生と農業生物資源研究所長 林健一先生に厚く御礼を申し上げます。

講演発表において、先づ

- (1) 蔣志農先生は、雲南省の自然条件と稲作の現状を紹介し、主要稲作地帯としての1500~2000 mの代表地域、昆明及び宜良に望ましい水稻品種の育種目標、並びに現在までの主な有望系統の特性、今後の育種の展望を述べられました。
- (2) 森谷国男氏は、有望育成系統の収量性を全乾物収量、収穫指数、稔実歩合、穂揃期の風乾重に対する生産効率、穂揃期の蓄積でん粉・糖の量と穂揃後の乾物増加重などによって解析し、昆明における実現可能最大収量を試算しました。
- (3) 王永華先生は日中共同研究グループの中国側組長として雲南省における日中共同の立毛検討会の概要を感銘深いビデオによって報告して下さいました。
- (4) 農業研究センター及び東北農業試験場における合系系統の生態的特性について、中根晃氏

が要約・報告されました。

- (5) 次に耐冷性について3つの報告が行われ、先づ堀末登氏は、日本・中国の計425品種について延べ17回の自然冷温を利用した圃場試験を行い、熟期別に強から弱まで4段階の標準品種を選定したほか、冷水掛流し法、生育期別の耐冷性検定法などについても報告し、耐冷性遺伝子集積の展望について述べられました。
- (6) 王懷義先生は耐冷性に関する簡易選抜法として、葯の長さに着目し、選抜を加える世代としては F_3 よりも F_4 の方が著しく効果が大きくなることを示しました。
- (7) 国広泰史氏は日本及び雲南の水稲品種が耐冷性の発現において安定性に大きい差があること、雲南品種の耐冷性は多数の遺伝子の集積によるものであること、穂孕期の耐冷性は強が優性であることなどから、母本選択や選抜法に示唆を与え、今後の耐冷性育種の方向を示しました。
- (8) いもち病抵抗性についても3つの報告が行われました。王永華先生は、1983~86年に実施した試験で、雲南省内の22県から収集した計278の菌株は52のレースに分類できること、粳栽培区、籼栽培区、粳籼混在区でレース構成が異なること、 $Pi-a$ 、 i 、 k^s 、 ta を侵す菌は普遍的に存在し、また $Pi-z$ 、 b など粳地帯、粳籼混在地帯で有効な抵抗性遺伝子は籼地帯では既に無効となっていること、陸稲に高度抵抗性のものがあることを報告されました。
- (9) 何雲昆先生はその陸稲品種の1つ毫乃煥(Haonaihuan)の遺伝子分析の結果を報告されました。トヨニシキ、トドロキワセ、麗江新団黒谷との交雑 F_3 系統を用い、研60-19など4つの菌株に対する抵抗性は相加的効果のある2つの遺伝子、愛75-7に対してはその他に1つの遺伝子が関与していることが示されました。
- (10) 東正昭氏は雲南陸稲にレース特異的抵抗性があること、日本品種のいもち病に対する反応が穂いもちで序列に変化が起こる場合があり、耐冷性の強弱が影響していることなどを紹介し、今後の雲南粳稲の耐病性育種の根幹に圃場抵抗性を据えるべきことを提案し、その育種方法について説明されました。
- (11) 雲南の稲については以上の他に、熊建華先生が省内から集めた計426品種のエステラーゼアイソザイム分析で、新たにバンド2Aに関する遺伝子が発見されたこと、7つに地域区分したとき、ラオス、ビルマに近い南部、南西部が最も遺伝的に多様であり、北方に単純化してゆく地理的傾斜が明らかに認められたことを報告されました。
- (12) 最後に中国側から廖昌禮先生、廖佩言先生、李兆方先生がそれぞれ、貴州省における水稲生産と育種、四川省における耐冷性育種の研究と収量性に関する選抜方法、黒龍江省における畑苗疎植による多収栽培の基本技術について興味ある報告をされました。日本側からは奥野員敏、丸山清明、守中正の各氏がそれぞれ、良質・良食味、多収性、および病害抵抗性に関する育種について、日本における現状と展望を報告されました。
- (13) 以上の講演発表をふまえて総合討論が行われました。ここで交されました意見はプロシーディングスに記録されて、講演とともにさまざまな場面で活用されることになりましょう。総

合討論および各講演発表で座長として御苦勞なされた方々、ならびに討論に参加して下さった方々に御礼を申し上げます。また、シンポジウムの間、終始御苦勞なされた通訳の方々に深く感謝の意を表したいと思います。最後に雲南省における日中共同研究、さらには日中両国における稲作研究の発展を祈念して閉会の辞といたします。